

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第2回フォーラム検討会議

逐語録

(木村) それでは、第2回フォーラム検討会議を始めたいと思います。今日は2時間の予定でしたが、3時間ぐらいじっくり話しましょうという意見がありましたので、3時間とっています。ご協力お願いできればと思います。

まずは、配布資料を確認します。まず、議事次第(F2-0)があります。次に、第1回フォーラム検討会議の議事録(案)(F2-1)です。次は、第1回業務推進全体会合の議事録(案)(F2-2)があります。次は、「フォーラムに関する議論の整理」(F2-3)です。次が、フォーラム参加にご協力いただける方へ、と書いてあるアンケート案(F2-4)です。そして、社会調査グループが作成した今年度のアンケート案(本調査票)(F2-5)があります。アンケートについてはあまり説明はしないと思いますけれど、参考ということで持ってきました。最後に、「原子力村」と書いてあるパワーポイント資料(F2-6)があります。こちらを用いて、本日竹中君から話題提供があるということです。以上ですが、大丈夫でしょうか。

0. 議事録確認

(木村) それでは議事に従って進めていきたいと思います。

まず最初に、前回の議事録を私が読みますので、前回の議論を思い出していただければと思います。逐語録と議事録は、この後事務局から皆さんにメールでも配信しますので、後でまた見ていただければと思います。

第1回のフォーラム検討会議。日時は11月14日水曜日です。場所はここでやりました。出席者13名です。

議事内容に入りますけれども、0番、1番は省略します。2番の中で、大切な部分だけをお話していきます。「既往のコミュニケーション・フィールドの研究の紹介と整理」ということで、竹中君に話してもらいました。資料の中で、一般的なコミュニケーション・フィールドを指して「フォーラム」という単語が使われているので、整理して使ってくださいという話がありました。あとは、3つの参加型手法の実践例について説明がありましたけれども、シナリオ・ワークショップやディープ・ダイアログについて、議論が進んでいました。特に、「満足が得られなかった理由の詳細が調査されることが望ましい」であるとか、「テクニカルな情報も調べてほしい」。こういう部分を少し整理をして情報提供してもらえると、フォーラムの設計に活かされると思いますので、引き続き竹中君をお願いをしたいと思います。

次に自由討議です。フォーラムの話題について、いくつか議論が出ています。前回はそこまで大きな議論ができませんで、私から議論の方向性を提示して終わりにしたのですが、そこだけ読ませていただきます。

フォーラムの設計段階は、竹中氏の整理の中で「観察者の目的設定」「フォーラムの目的設定」「テーマ研究、専門家ネットワーク」「市民パネル募集、決定」「ワークショップ（フォーラム）の内容、段取りの決定」となっている。このうち、「フォーラムの目的設定」「市民パネル募集、決定」については、まだ議論の余地がある。これらを決定した上で、「ワークショップ（フォーラム）の内容、段取りの決定」を行なっていく必要があるということです。

12月末に社会調査票を確定させる必要があるため、この辺りの情報を確定させる必要があるということです。ということで、今回の議論につながるような部分について、ピックアップしました。

逐語録のほうもメールで事務局からお送りしますので、そちらも見ていただいて、意図が違うなどの修正点があれば、事務局に連絡していただいて、少し修正を加えるというような手続きでいきたいと思います。本来この場で承認とかをやってもいいかもしれないのですが、あまり時間がありませんでしたので、確認のための資料として見ていただければと思います。

次に、業務推進全体会合の議事録も確認しておきます。11月14日にフォーラム検討会議があり、それを受け全体会合が11月16日にありましたけれども、こちらのほうが、フォーラムの議論という意味では、かなり中身に突っ込んだ話が出ていましたので、こちらでも復習してみたいと思います。

「フォーラム検討グループ進捗報告」。竹中氏より、既往のコミュニケーション・フィールドについての調査内容が説明された。それを受けて、神崎氏から、先日のフォーラム検討会議での論点の説明がなされた。様々な視点から議論がなされた。

情報は、あるところからないところに流れる。逆は起こりえない。市民から専門家へ情報が流れるようなトピックを選択すれば、うまくいくのではないか。例として、専門家たちが作った組織を市民はどのように見ているか等、と書いてあります。

目的が未定というのはどういうことか。目的は、原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドを試行して、社会技術として政策提言することではないのか。それに対して、今回の整理では、それは「観察者の目的」に分類されると。観察者の目的を達成するための「フォーラムの目的」が決まっていないという意味であるということで、質疑応答がされています。

本プロジェクトは画期的なテーマに取り組んでいるが、その分試行錯誤の面も多いだろう。政策提言までは到達しないのではないか。具体的な論点を絞って議論をするべきではないか。これに対して、具体的な論点を絞って、共有することは大切である。国の税金で

業務を行なっているのだから、研究者の責任として、最後には何かしらの提言を出すべきだという趣旨で発言をしている、という話です。

コミュニケーション・フィールドの分類について、「参加・協働・権限委譲」が2つに分類されているが、「参加」、「参画」、「協働」という3段階に分けると、より目指すものが分かりやすいのではないかとのこと。

「参加」というのは、共に話し合っ共有をする。「参画」は、解決策を企画段階から共に作る。机上の議論である。「協働」は、「参画」で考えたことを実際に行なうということだということです。

そして、このプロジェクトでは、最初の段階の「参加」をしっかり行いたいと思っていると。「参加」がしっかりできないと、その先もできない。お互いが尊重し参加できる場を作っていきたいということです。

「専門家」と「市民」という分け方より、「ムラびと」と「市民」という分け方のほうがいいのではないかとのお話がありました。

あと、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センターで様々な市民参加の取り組みが行なわれている。市民参加の取り組みはすべて失敗であったと結論付けられている。ただし、それは書籍などの形で世の中には出ていない。研究者の失敗体験をインタビュー調査したほうがいいのかもしいかなということ、これは検討したいと思っております。

「反対派」の主張が反映されないことをもって、「市民」の活動が失敗したと捉えられているケースがあるのではないかと。市民イコール反対派のような捉え方があるのではないかと、という議論がありました。

強固な反対派でなく、一般的な感覚を持った市民の声が活かされるような場が必要なのではないかと。従前は「拒否しない（声を出さない）」を「賛成」と捉えていた。それを、「明確な賛成が得られなければならない」という考え方に変えれば、一般的な市民の声も入ってくるのではないかと議論。

追加で調査すべき内容については、竹中氏が中心に調査を行ない、フォーラム検討会議等で随時発表し、情報共有していくことになった、ということです。

以上が、前回のフォーラム検討会議と、全体会合の中で議論された内容でした。前回までどういう議論だったかを確認していただければと思います。

1. フォーラムの検討

(木村) それでは、前回までの流れを思い出してもらったところで、「フォーラムに関する議論の整理」ということで、私がまとめましたので、こちらを見ていただければと思います。

竹中君のまとめの中で、5段階で考えていくと考えやすいのではないかと話だったの

で、それに従って、分かっているところと今後議論しなければいけないところを整理しました。

まず、5つの段階があります。「観察者の目的設定」が1番目。「フォーラムの目的設定」が2番目。次が、あえて太字にしていないのですが、「テーマ研究・専門家ネットワーク」。次が、「市民パネル募集、決定」。最後が、「ワークショップ（フォーラム）の内容、段取りの決定」ということになっています。

ここには現状を載せています。一重の丸（○）と、二重丸で中が黒いもの（◎）と、二重丸で中が白いもの（⊙）があると思います。黒二重丸は、なんとなくもう決まっているので、こういうものだという形で次に進みたいと思います。一重の丸は、これからも十分に議論する必要がある。エンドレスに議論する必要があるかもしれないなというものです。白二重丸は、今回喫緊に検討して結論を出しておかないと次の手続きに行かないというものになりますので、今日は白二重丸を中心に議論していきたいと思っております。

では上から確認をしていきたいと思います。「観察者の目的設定」。これは研究実施者、我々側の視点ということになります。研究としての目的は、「ムラびと」と「市民」との協働によって「原子カムラ」を越えるという最終目標に一步踏み出すために、「ムラびと」と「市民」とのコミュニケーションの場（フォーラム）を設計し、「ムラびと」と「市民」の相互作用（ダイナミズム）を学術的に記述し、「原子カムラ」を越えるための要件を洗い出す。これが研究全体の目的になっていると思います。前回までは「専門家」と「市民」と書いてありましたが、前回の議論を踏まえ、「専門家」を「ムラびと」に変えました。

この目的を達成するために、どういう条件が必要なのかということが次に書いてあります。この条件についても議論しないといけないなと思っておりますが、一応読ませてまいります。

1つ目はコミュニケーションです。コミュニケーションとは、本当は相互作用だという話も前回ありましたが、とりあえず「情報の移動」と捉えています。コミュニケーションが起こることが条件であると。

従来の情報の移動は、「ムラびと」→「市民」であるので、情報の移動が「市民」→「ムラびと」になる話題を見つけていく。両方向に情報の移動が起こるようにしていく。さらに言うと、これは実は「フォーラムの目的設定」に関わってきます。この移動が「価値がある」と共有できるような話題でないと、フォーラム参加者の目的に合わないのので、そういう価値のある話題になる必要があるのかなと考えております。こういう話題を見つけて、コミュニケーションを実施する。

さらに、お互い（特に「ムラびと」）の解釈・思い込みの変容、価値観の変容、リフレーミング、新しい気づきが起こること、が大切なのかなと。リフレーミングというのは、下に注をつけています。できごとやものごとの意味の枠組みを変化させること。これは専門用語ですけども、そういうものです。

そして、括弧で書いてありますけれども、「協働してリスクに対応する」という意識を養うこと。ということで、この辺りまでくるとリスク・コミュニケーションみたいな話がようやく見えてくるのかなと思います。

リスク・コミュニケーションを実施するための前段階の土台を作ることが、ある意味ではこの研究の目的で、それがどのような条件で起こるのかということ洗い出す必要があるのですが、とりあえず、今頭で考えてみるとこういったところかな、とっています。これらの条件に関しては、自由な意見を聞きたいと思っています。

次は「フォーラムの目的設定」です。これはフォーラムに参加してくれる20人（市民10人、ムラびと10人）の視点から見た目的です。これをどのように設定しておくのか。フォーラムの参加者は、何を目的に参加するのかということが、やはり問題になってきます。フォーラムで何を話題とするのか。結論をどうしていくのか。どこまでを求めていくのか。さらに、オープンエンドか、クローズエンドかというところまで含めて、議論をしていく必要があると思っています。

3番目の「テーマ研究、専門家ネットワーク」。これは、話題によるなど。「市民」→「ムラびと」になるような話題を見つけていくということであれば、講師はいらないのかもしれませんが。話題を議論していった上で、どうしても必要であれば、講師の選定なども含めて考えていかなければいけないかなと思っていますが、これはある意味で従属なので、まだ先の議論だと思っています。

次が、「市民パネル募集、決定」の項目ですが、決まっていることは、1月実施の首都圏調査、学会調査からそれぞれ10名選択することです。これは2月にアンケートが戻ってきたときにやることになります。

そのときに、何を基準に10名を選択するのかということ、フォーラム検討会議でも議論して、社会調査グループに反映してもらい、最後は調査会社をお願いする必要があります。F2-4とF2-5が、現時点の調査票案になりますので、後ほど私のほうから簡単に説明をして、ご意見を聞きたいと思っています。

さらに、フォーラムのことを説明する書類も必要です。どのようにフォーラムのことを表現をして、参加してもらうか、という文面を作らなければいけません。こちらも早めに行なえばいけないと思っています。

最後に、「ワークショップ（フォーラム）の内容、段取りの決定」です。フォーラムまでの日取りも、アンケートの文面の中に盛り込まなければいけないもののひとつだと思いますので、これも早いところ決めないといけない。あとは公開の程度です。こちらも少し考えて、決めなければいけないと思っています。

裏面は、参考を書いています。学術的には、昔からよく言われている「一般システム理論」というものがあります。どちらかという、今までは、「絶対的な何か」に対して市民が「要素」という捉え方でしたが、本来システムというのは、部分、部分が全て要素になって、相互作用するということが書いてあります。参考になるかなと思って書いていますが、私のメモみたいところがありますので、こんなものなのか、と思ってもらえればいいと思います。

ポイントを言うとすれば、5つ箇条書きがありますけれども、1つ目と3つ目は大切なと思っています。「システムは互いに作用している要素からなるものである」。要素とかシステムという言葉は、いろいろな定義はありますけれども、そこはほんわりと考えていただければと思いますけれども、お互いに相互作用するのですよということ。「システムは目的に向かって動いている」ということで、何か目的を持たないと、システムは機能しないということになりますので、フォーラムの設計のときにもその辺りを考えていく必要があるのかなと思っています。我々の中での目的は明確なのだけでも、フォーラムに参加してくれる人たちが自立的に動いていってくれる、相互作用するシステムとして機能するためには、フォーラムの目的が何か必要なのではないかと思います。

下には、オープンエンドについて書いてあります。学校教育の観点から、オープンエンドがどういわれているかという、「後で変更可能な。自由形式の」というのが原義らしいが、教育界では一般には、「明確な結論を出さない」「各自の判断に任せる」というような意味で用いられていると。そのことによって、多様な考えを生産させ、子どもの個々の主体性を尊重するのだという主張である。これがオープンエンドという議論です。この後には、オープンエンドはまだ時期尚早である、というような論調が続くわけですが、まあそうは言っても、我々の中では、こういう議論がどうなされていくかというのを考えるときには、少し参考になるかなと思って、取ってきました。

もう1個のポツは、オープンエンドとは、簡潔に言えば、考えることを閉ざさないという意味である、というような話もあります。こういうことも踏まえて、私の中ではやはり、オープンエンドの会議設定がいいのかなということも考えていますので、その辺りもまた議論をしていけたらと思っています。

ということで、早速議論に入っていきたいと思いますが、まずはこのプリントについて質問をもらった上で、順番に議論を展開していこうと思います。下から進めると、上のほうが追いつかなくなってしまうので、議論の順番は上からやっていきたいと思っています。まずは、書いてある内容の確認からお願いします。

—— 一般システム理論の部分は、先生のメモ的なものだとおっしゃいましたが、このシ

システムというのは、具体的に言うと、例えばどういうもののことですか。

(木村) 例えば、組織などです。「機械システム」、機械というのは部品に分解できるのだけど、それぞれ相互作用すると、機械として機能する。それがシステムというものなのですけれども。それが社会学などにも転じて、組織論、文化論、そういうところにも一般的に通用するものとして、大きな体系になっているのです。

我々としては、このシステムというのは、例えば組織とか、会議体みたいなものとして捉えるといいかなと思います。

—— ここにこういう参考資料が載っているということは、木村先生は、このフォーラムがひとつのシステムであると。それを皆さんに認識してもらいたいということですね。

(木村) 認識してもらいたいし、それをどうやって動かしていくのかということを考えていく必要があるなど。だから、「ボンと何かがあって、そこに飛びつく」ではなくて、「皆が役割分担をもちながら機能して、何かひとつの目的に向かっていく」というような話がいいかなと思っているということです。

—— そして、ここにあるのは一般システム論だけれども、今回、新しいものを築こうということですよ。

(木村) そうですね。これはあまりに一般的で、それはそうだとしか書いていないのですけれども、今回の我々の目的は、どうやって越えていくかということで、そこに向けてどういうシステムを作って、回していくとそこに近づけるのかという議論をしたいということです。

あとは、「学習する組織」とか、「ガバナンス」とか、難しいことも一旦書いたのですが、少し目的過ぎるかなと思って、消しました。でも、オープンエンドを最後に書いたのは、そういう意味で、考えることを閉ざさない、考えることをやめないというところが、とても大切なポイントかなと思って書いたということですね。

—— 黒丸はもう決まっているとおっしゃったけど、「テーマ研究、専門家ネットワーク」の話題によってというのは、フォーラムの中でということですよ。

(木村) そうということです。フォーラムの中の話になってきます。例えば、「環境問題について市民の意見をまとめます」みたいなテーマになったときに、話題提供者として、どのような研究者がいるか調べて、適切に配置するという課題が入ります、ということですよ。

(竹中) そうです。

(木村) 今回は、そういう方向になるかもしれないし、ならないかもしれないけれども、今のところ、講師なしでできないかなと思っているところです。

—— ひとつ伺いたいのですが、観察者の目的というのは、はっきりしていますね。フォーラムに参加する人に対して、観察者の目的は、はっきり明示されるわけですね。その場合に、「自分たちがその研究を成り立たせる」ということだけでも、参加者の目的にはならないでしょうか。

(木村) 自分たちというのは誰ですか。

—— フォーラムの参加者です。フォーラムに参加することによって、その研究を、自分は参加者ではあるけれども、観察もできるという、そういう形。

(木村) その議論をしたいのですよ。実は、こういう社会実験をするときに、研究者の目的を明確に、だまさないで出すというのは、倫理的要件なのです。

前回紹介があったコミュニケーション・フィールドの実験のときには、その辺がどうなっていたのかも、気になっているのです。市民参加が成立しうるかどうかを実験するために、コンセンサス会議をしました(観察者の目的)。コンセンサス会議の目的(コミュニケーション・フィールドの目的)はこれです。そうやって言っていたのか。どうなのだろう。

(竹中) 調べてみますけど、「実験です」みたいな言い方はしていないと思いますよ。

(木村) 今回も実験ですとは言わないけど。その辺りも少し気になったのですよ。

倫理的観点から言うならば、「フォーラムの中ではこういうことについて議論をしておうと考えています」と。「その目的はこうです」とか。だから、目標と目的ぐらいに使い分けて、目標のほうが大きいのですかね、目的のほうが大きいのですかね、使い分けて出すのかな、というおぼろげな気持ちはあるのですが。

もしくは、この目的を一緒にしてしまっ、て、どういう議論ができるか、ということもありうるかもしれないなと思っています。実はこの「観察者の目的」を達成するためにどんな条件が必要なのかというのは、「フォーラムの目的設定」と近い議論になっていますので、この辺りを、今日しっかり話し合いたいなと思っています。

—— 市民パネルはアンケートを参考にして決めるとおっしゃっていましたが、今

までの話を聞いていると、学会の先生方を選ぶ基準は、(社会調査グループに)任せてほしいというようなご意見だったような気がするのです。そうすると、首都圏調査の 500 名のうちの 10 名をどのような条件で選ぶかを考えればいいのですか。

(木村) いや、向こう(社会調査グループ)はそう言ってますけど、業務上はこちらでやることになっていますので。

—— では、それぞれ 10 名の、20 名全員に対してということでもいいのですね。

(木村) はい。その議題になったときに、その辺りもご説明します。社会調査グループでどのように議論しているかも、後ほどご説明して、少し時間をとって議論させてもらえればと思いますので、よろしくお願いします。

—— 観察者の目的は、「ムラびと」と「市民」の相互作用を学術的に記述し、「原子カムラ」を越えるための要件を洗い出す。ということは、「ムラびと」が原子力学会の人だと読み替えると、原子力学会の人と市民に有意な差があるのは、原子力についての知識ですよ。原子力の専門性が高い人と、一般的な方との間のコミュニケーションのメカニズム、どこでコミュニケーションがうまくいくのか、いかないのか、それを学術的に研究しましょうという理解でいいですか。

(木村) はい。

—— フォーラムの中で、何をテーマに議論をしていくかは、まだ決まっていない。

私の疑問は、要するに「ムラびと」と「市民」を 2 つのグループに分けた理由は、原子力についての専門性ですよ。フォーラムで取り上げるテーマが、原子力ではないものになったときには、2 つのグループの有意差がなくなるのではないかと。例えば、「山登り」というテーマを取り上げたら、同じ土俵になってしまって、2 つのグループの間のコミュニケーションの観察をする意味がなくなるのではないかと。だから、2 つのグループの本質的な違いが意味があるようなテーマ設定にしないとまずいのではないかと気がしますがけれども、どうなのでしょう。

(木村) そうですね。それはまさに観察者の目的に入っている議論ですね。それでは、もうその議論を始めていきたいと思います。

実は、その辺りはよく分からないのです。そもそも、原子力の議論をしたほうがいいのか、しないほうがいいのかすら、私の中で結論が出ていないので。今のご指摘は、「ムラびと」と「市民」の本質的な差が原子力の知識なので、これが活きるような議題設定をし

ないと意味がない。今、こういう意見が出ています。

(竹中) 加えて質問なのですが、例えば「山登り」のテーマで、「ムラびと」と「市民」が少し近くなりました。お互いコミュニケーションをして、何らかの気づきがありました。ただ、原子力的话题に戻ったときには、今までと何ら、コミュニケーションのやり方に変化は生まれませんでした。といったときに、このコミュニケーション・フィールドは成功なのか、失敗なのか。

(木村) 山登りで議論して、原子力に戻って見たら、今までと変わらなかった。

(竹中) そうですね。そちらでは皆何らかの気づきはあったのですけれども、原子力の舞台に戻ったときは、何も変わらなかった。ということが分かりましたといったときに、これはどう捉えればいいのか。

山登りという話題ではかなり、ムラびとという枠を越えたお話ができました。しかし、原子力的话题では、やはりしっかり対立があったと。

(木村) これが意味があるかどうか。学術的には、意味があります。なぜなら、共通だと分かったのに、結局変わらない、ということが分かったので、意味がある。だけど、この研究の目的に即しているかという、そうではないと思う。

(竹中) これが学術的に意味があるとしたときに、では、最後の「原子力は変わらない」というところをフォーラムの中でやらなかったとするじゃないですか。「原子力でなければ分かり合える」だけでも十分なのか。

(木村) それはどうでしょうか。

—— でも、それでは原子力ムラと市民の意味がないですよ。

—— それなら、誰でもいいではないですか。

(竹中) そうすると、原子力の話は絶対に必要だということですよ。

—— 文科省の人は、「ムラびと」は何か異星人みたいな人だという結論にしたがっているのですか。

(木村) そんなことはないです。そうすると、どこかでやはり原子力的话题は入れない

といけない。これはひとつ、重要ですね。

—— 「ムラびと」と「市民」の本質的な差は、原子力の知識だけではなくて、何と云うのかな、感じ方というか、感覚的な、

—— ものの発想というか。

—— それもあるのではないかと、いう気がするのです。知識は、市民も得ようと思えば得られますよね。むしろこちらのほうが大きな違いがあるのではないかと私は思うのですが。

—— 私は、専門家の人は、申し訳ないけど「専門ばか」という言い方もあるではないですか。専門の中で凝り固まってしまうとか、そういう部分があって、一般の人が何か言っても、そこに何か有意義なことが含まれていたとしても、「ああ、どうせそんなのは一般の人が言っていることだから」としりぞけてしまう。そういうところがあるのではないかと。それを何とか越えられたらいいなと思うのです。

—— それは原子力だけの話ですか。

—— 原子力だけではなくて、どんな専門でもそうですけれども。

—— 特に原子力がその傾向が強い、ということですか。

—— 原子力は、私からするとものすごく難しそうだから、特にその傾向は強いかもしれないけど、どんな専門であっても、専門家対一般の人となったときには、そういう壁があると思うのです。

(木村) 感覚とかの話は、認知の議論で言うと、「社会的リアリティ」と言いますね。社会的現実感。

その人が生活している環境が違うので、必然としてその人が「普通」と思っている感覚が「普通」と違うのです。どういう人が周りにいて、どういう話をしているかというのが、その人にとって「普通」であるのかという議論です。

—— 普段付き合っている人の範囲が全然違ったりするわけですからね。話題も違うし。

(木村) 「普通」が違うので、この辺りの、感覚とか、発想が出てくるし。専門家から

すると、自分の周りで「普通」でない人が市民だったりするので。そうすると、「普通」でないから排除してしまうという、「専門ばか」の手段ができてくるわけです。

—— 話題については、私も最初は、仲良くなるという点で原子力ではないほうがいいかなと今まで思っていたのですけれども、ずっと原子力の話題でやって、どう変わっていくか、というほうが面白いなど。それでも仲良くなれたのか、原子力をやればやるほど離れていったのか、というようなところは、面白いかなと思います。1回くらいは原子力以外でもいいけれども、あとは全て原子力でもいいかなと、今思いました。

それと、具体的にどうやってそこで話をするかを、私は具体的にイメージをしないと分からなかったのですが、考えてみたのですが、私が客観的にものを見れるときには、やはり自分の意見を言っているときは駄目ですよね。人とやり取りしているときも駄目ですよね。ということは、真ん中にいて、この人の意見はこう、この人の意見はこう、と両方を聞いているとき。私が真ん中にいて、自分の意見を言わずに、人の意見を聞いて間をとりもつとき。あなたはこういうことをおっしゃったのですよね、みたいなことを言って、意見の交換をする。真ん中にいる。

さらに、「あなたの話を聞いて、私はこういうふうに思った」ということを、2人に後で言ったら、全然言っていることが違うではないかとか、こういうことを言ったのに理解が違うとか、そういうので何か、いろいろなものが出てくるかなと思うのです。

やはり、聞くということをしないと、そして整理しないと。自分はきっと、言ったら言っぱなし、聞いたら聞きっぱなしかなと思って。

—— それは重要ですね。意見がコンフリクトしている同士で話をしている、相手方が自分の意見になかなか賛成してくれないと、どんどん本人はむきになって、自分の主張をするのだけれども、どちらの立場でもない第三者から、「あなたの言っていることは、こういう意味ですよ」と言われて、それが自分が言わんとしていることと違うということに気づく。

反対している人が理解してくれないのは、違う考えを持っているから、「あいつは分かっているながら賛成してくれない」と思っているから畳み掛けるのだけど、「あなたはこう言っているでしょう」と第三者から言われて、それが自分が思っていることと違うということに気がつくというのは、とても重要なことです。

—— その三者を、参加者でやれば良いと思うのです。

—— そういう場の設定ができると、面白いと思うのですね。

「専門ばか」というのは、大変面白い視点で、専門家は、自分で言っていることは、相手に通じていると思込んでしまうのですよ。

—— そうですよ。

—— ところが往々にして、自分が言っていることが、全然誰にも理解されていない。それはあるのだけでも、相手が自分の敵対者だと、「敵対者だから分からないふりをしている」と思い込んでしまう。自分の説明はパーフェクトだと思ってしまう。それを気づくような場設定というのは、私は面白いと思うのです。「あなたが言っていることはこういうことですか」と第三者から言われる。そういう場。

—— 今言ったのは、要するにファシリテーターの役割ですよ。だから、皆が順次ファシリテーターをやってみると、気がつくのではないのでしょうか。

—— そう思う。

—— そのファシリテーション能力は、すごく個人差があつて。

—— 専門家だからファシリテーションできるかという、そうでもないのですよね。

—— でも、通常だとファシリテーションする人はできれば有能な人で、橋渡しをできるということが目的だけど、今回はそれが目的ではないから。ファシリテーションする人が順次変わって、皆がそれを経験するほうが、経験としていろいろなものが吹き出してくると思うし、気づきもあると思うので、皆がすればいい。だから別に誰でもいい。

—— そうですね。誰でもいいのだけれども、このフォーラムをやることによって、ファシリテーション能力の向上にもなるのですね。

　　だいたい、しゃべり慣れていない人は、しゃべり慣れている人でもそんなのだけど、難解な説明をするものですから。この人は一体何を言っているのだろうと思うことがあるのだけれども、ファシリテーターの人が本人に確認するのを聞いて、ああ、そうか、そういうことを言いたかったのかと気づかされることって、往々にしてあるので。

(木村)　そうですね。よくあるのが、市民の質問が理解できない専門家を見る機会がよくあります。

—— そんなのはしょっちゅうですよ。聞いていることと全然違うことが返ってくる。

—— あれは分かっていないのか。はぐらかしているのかと思った。

—— 私もわざとだと思ってた。

(木村) わざとではないのではないかと最近思ってきたのですよ。

—— 国の場合は、わざとの可能性もあります。なぜかというと、国の立場は非常に難しく、常に何か告訴を受けているのです。そこで負けてはいけないのです。だから、国の人は、何を言われても、鸚鵡返しに頑張らないといけないというところを持っているのですよ。核心部分に近づくと、ある一定程度以上は絶対に何も手の内を出さないようにして、ガードしてしまうという、その可能性はあります。

一般的な学会員、専門家はそんなことはあまりないですから、ただ説明が下手なだけ、聞き取れないだけという、理解能力の問題のケースが多いけれども。

(木村) そうですね。相手が何を質問しようとしているか理解できない人が多いですね。

—— それがだから、感覚の違いなのではないですか。

—— それと、感覚とか発想のところは、役所で長年仕事をした人とお話をして、私も驚いたのだけでも、そういう人は一般的な国民の人にどう理解してもらおうかということを考えていると我々は思っていたけど、全然違うのですよ。そんなことは何も考えていない。何を考えているかということ、訴訟とか、それから国会で反対派の人が、原子力反対の政党を通じていじわるの質問をしてくる。それに対してどう受け答えをするかということしか、日常考えていない。そのために、そういう役所の人たち、人数を養っているわけです。だから、ある意味役所も、反対派のためにそういう権益を確保できているみたいなどころがある。なぜ一般市民が理解できない資料を山ほど作るのかと思ったら、それしか考えていないと。それが仕事だという話を聞いて、啞然としました。

この前も紹介しましたが、2010年10月8日、9日に、保安院が初めて「規制情報会議」を開きました。コミュニケーションのセッションで、保安院の人が非常に分かりやすい一般市民向けの資料を提供をしたら、柏崎の方が、「初めてこういう資料を拝見しました。今までは、保安院の人が作る資料は、ことごとく訳の分からない、反対派向けの資料ばかりで、いつも私たちは苦勞をしていたけど、こういう資料も作ろうと思えば作れるのですね」という話になって、私はそのとき、面白い会話だなと思ってフロアで聞いていたのです。

その後、規制側で仕事をした人に、今ご紹介した話を聞いて、ああ、なるほどなど。大多数の一般市民に対する説明は、日常考えていない。だから、感覚、発想が、一般市民の方から見るとおかしい。どうしてああいう説明しか、発想しかできないのかというところに通じているのではないかという気がします。

(木村) 「ムラびと」の発想について、その原因がこういうところだとすると、どういう工夫をすれば越えていけると思いますか。ファシリテーションはひとつの方法だと思いますけど、何か他にありますか。

—— 次の議題というか、どういう人を選ぶかという点ですが、私は、そういう典型的な人を入れないと面白くないと思います。

—— 市民も、両極端な典型的な人がいて、同じと市民といっても、こういう市民とこういう市民がいるのだということを、実際に発言も一緒に見てもらわないと、変わらないですよ。

—— そうですね。市民の側もいろいろな市民がいますから。

—— どこかの段階で、最初のほうがいいと思うのですがけれども、原子力についての話題を入れるときに、共通認識というか、最低限の知識の部分で、原子カムラの方から一般市民に説明してもらったほうがいいと思うのです。用語とか、今までの経緯とか、事故後の経緯とか、何でもいいのです。ある程度、議論のベースになるような知識とか情報を、「普通の言葉」で説明していただいて、分からないところは、一般の人から徹底的に質問していい、みたいにして。いかに、専門家のおっしゃることが一般市民にスムーズには理解されないかということ、ムラの人に分かってもらったらどうかなと思います。

その苦勞を乗り越えて、ある程度の議論が成立するくらいのベースができたところで、もう少し高度な話題に移るとか。いきなり賛成反対とかそういう話ではなくて、まず共通の議論ができるだけの言葉の認識をする。その部分でムラの人に少し苦勞をしてもらって、いかに言葉が通じないかということを知ってもらった方がいいのではないのでしょうか。

また、一般の人からは、質問すればきちんと答えてもらえるということを、(もしきちんと答えてもらえたら) 認識できて、立場が違って、一定の信頼感みたいなものができるのではないかなと思うのです。

—— 私は、その立場を越えた信頼感は、5回やったときにできるのだと思うのです。それが最終の目的というか、目標ではないかという気が、自分の中ではしているのですけど。

(木村) でも、その方法だといわゆる「情報提供」になってしまいますが、やはりそこから始めるのがいいのでしょうか。

—— ただ、その情報提供が、一方通行ではなくて、「ここが分かりません」とか、「今言

った、その言葉が分からないのです」というようなやり取りを随時入れながらやっていくとか。

(木村) それが、できるかどうかかなのですよね。そこで「ムラ」ができて、せっかくフォーラムをやったのに、「ムラ」対「市民」になってしまった、とならなければいいなと思っっているのですけど。

それを、ファシリテーションだけでやるのか。それよりは、どちらかというとは、自立的にそれを崩していくようなモデルが見たいと思っるところがあります。最初はそれでもいいのだけど、というか、そうやって集めますといたら最初はそうなると思うのですよね。「ムラびと」対「市民」みたいな感じになると思うのだけど、そこがどうやって瓦解していくのか、という実験なのですよね。だから、それが結局「体制みたいなもの」対「市民」にならないようにしないといけないと思っっていて。

—— 原子力の話をする、木村先生が心配するように、分かれるはず。当然ながら、「ムラびと」と「市民」の間にはそれなりのギャップがあるわけだから。ギャップがなければ、「ムラびと」の価値がないのだから。コミュニケーション、質疑応答をしながら、その距離は縮まると思うけれども、100%一致するというのは無理だと思うのですね。

それが近づいたか近づかないかというところで、5回やったときに近づくようになったというのがハッピーエンドなのだけれども。

別の、例えば「山登り」でも何でもいいのだけれども、別の話題のときには、その元々の質の違いがないはずだから、同じ土俵で議論ができますよね。それでもできないのだったら、何か別の欠陥があるということなので。その可能性もあります。

(木村) そうですね。

—— 原子力の話題というのは、やはり原発の話題ということですか。

(木村) いや、何でもいいと思っっています。

—— 頭の中が整理できていないのですけれども、原子力の話と放射線の話は、まったく別の話なのですか。

(木村) まったくではないけれども、基本的には別だと思っます。

—— そうすると、専門家調査というのは、原子力学会ですよね。

(木村) 原子力学会ですが、そういう意味では、原子力学会の中には、原子力をやっていない人たちもいます。放射線をやっていたり、医学的な話をやっていたり。

—— 去年の原発事故以降、私たちもいろいろなところの勉強会でお話を伺ったりしました。原発のほうの放射線はものすごく怖いんだけど、医療の面では、私たちは日常的に放射線を浴びているわけですね。日常的ではないけれども、骨折したらレントゲンとか、胃の検査をするのに X 線とか、必ずついて回るわけだし、うんと身近なところにあるわけです。でも、身近でありながら、よくよく考えるとよく分かっていないまま受けている。でも、病院で放射線を浴びることに関しては、そんなに危険を感じているわけではないですよ。だから、そういう入り口というか、切り口というか、そういう工夫はできないかなと思います。

(木村) 具体的な話題の工夫ですね。

(竹中) ちなみに、この原子力の感覚、発想が違うというのは、どういう話題のときに特にそれを感じるのですか。

—— それはもちろん、原子力発電。

(竹中) 基本的な情報のところでも、解釈の違い、解釈といたらおかしいな、もう感覚が違うと思うのですか。

—— 基本的な情報というのは、何を意味されているのですか。基本的な情報も、原子力の専門的なことですよ。

—— いや、もう少し手前のところ。例えば、原子力発電反対と言っている、原子力発電がどういう仕組みかも全然分からないまま、ただ反対と言っている人が多いかな、と思うのです。そういうことです。

—— では、基本的な情報というのは、その原子力発電に行く、もう少し手前の、ということですか。

—— そうですね。手前から、原子力発電までの。それから、私がそれを言ったときには、やはり放射線とか放射能と言われること全般に対して、です。

—— 学会の先生方の間でも、物理学みたいな感じで原子力の研究されている先生と、放

放射線の医療のほうの勉強をされている先生では、感覚が違ったりすることはないのですか。
「原子力」とひとつ置いたときでも、いろいろ専門は細分化されているでしょうから。

—— それは大いにあります。東大のここは、昔は原子力工学科といたのですが、こういうところで原子力を勉強した人は、自分の専門の話だけではなくて、原子力全体を勉強しますから、今おっしゃられた放射線の健康影響の話も必須科目で勉強します。だから、いわゆる原子力を専攻して、原子力学会で仕事をしている人は、それなりの基礎知識はある。

だけど、例えば機械の専門家、電気の専門家、化学の専門家で、原子力の仕事に携わっている人。いわゆる原子力の勉強をせずに、原子力の仕事に携わっている人も大勢います。むしろそういう人のほうが多いと思うのですよ。

そうすると、そういう人に、原子力学会で原子力の仕事をしているから、放射線の健康影響のことも当然知っているはずだと思って聞いても、実は何も知らない。そういう人もたくさんいるのですよ。

放射線を専門的にやっている人でも、例えば、放射線の測定機の仕事をしている人がいます。原子力施設では、必ず放射線の測定をしなければいけない。放射線の測定工学という分野もあって、そういう専門の人もたくさんいらっしゃる。それでは、その放射線の測定工学の専門家が、放射線の健康影響について詳しいかということ、ほとんど知らない人のほうが多い。まあ、すぐ隣の領域だから、他の人よりは知っているかもしれないけど、そういう人に、福島に行って放射線の健康影響について説明してきてくださいと頼んでも、いや、私はそんなことはできませんと。その程度の知識しかない。

だから、そういう意味で言うと、原子力学会の人だったら 100 ミリベクレルの放射線が健康にどういう影響があるのか、誰でも説明できるかと思ったら、大間違いです。

—— 意外と、そうしたら、(市民と) 感覚が同じ人もいるかもしれない。でも、分からないですね。どういう人が選ばれるかにもよるから。

—— そうですね。だからそういう意味で、人選は、非常に重要だと思います。

—— でも、この研究テーマは、やはり見えない壁があるから、それをどうやって越えようかというわけだから、

(木村) 見えない壁は、どこにあるのかよく分からないのですよ。だから、実際に 20 名集めてみたら、壁がないかもしれない。ないというのも、それはまた大きい学術成果なのです。

—— あると思っているだけで、もしかしたらないのかもしれないですね。

(木村) もっと規模が大きくなったら出てくるとか。

—— 私は、先ほどおっしゃられた「感覚の違い」はとても大切だと思うのです。知識は、こうですと言われれば、ある程度のところまでは皆共有できると思うけど、そこから安全とか安心とか、原発があつていいとか駄目だとか、そういう話になると、市民だったら自分の生活を基に考えるから、「安全だと理解しても要らない。より違うものがある」というような感覚だと思うのですよ。もうそこで、自分の生活の中のものとして考える。経済の発展もなければいけないから、本当は必要だろうと思うけれども、そうすると、どちらを天秤にかけようかとか、じゃあ 30 年後にはなくしてほしいとか、そういうことですね。自分の生活をベースに考える人がいて。

専門家の人は、自分の専門とか、研究とかをベースに考えるので、本当に安全と思っただけ、いらっしゃるかどうかは分からないのだけど、そこをベースに原子力のお話をされるので、元々が違う。

では、専門家が、自分の専門を外して、自分の生活の中のものとして、あつていいとか駄目だとか、本当にどうですかというような質問をしても変わらないのだったら、それが感覚の大元の違いではないですか。

(木村) 市民は自分の生活の中で考えるとおっしゃいましたが、専門家も自分の生活の中で考えると、原子力をやらないと、食べていけないのですね(笑)。そういう生活です。

—— だから、専門家が専門性を外すということは、ありえないのですよ。専門家の方は、それが今とりあえず自分の人生の全てなわけです。仕事。

だから、今のお話の「市民」は、「原子力で生活の糧を得ていない市民」の感覚ですね。例えば同じ市民であっても、そういうことを仕事にしているメーカーに勤めている方だったら、もうそれは専門家なのですよ。

—— だから、普通の市民で、原発の中で働いていらっしゃる方がたまたま(フォーラムに)来れば、そこがベースで、となっちゃうわけね。だから、やはり生活のところで感覚が違うけど、専門家の方は特に原子力が専門だから、感覚がすごく違うと。

—— 学会の人は、ほとんどの人が仕事で原子力に関わっているということ。つまり、原子力を飯のタネにしている。というのがひとつ。

それから、原子力学会は「原子力の平和利用の推進」を目的のひとつに掲げていますから、そういうものに所属して活動しているわけだから、「自分の生活感覚で、原子力は受け

入れられない」という人は、まずいないわけです。

自分の飯のタネでもあるし、それを推進するところで活動もしているわけですから。それが嫌だったら、そんなところに所属して、毎年年会費を払いませんよ。だから基本的には、学会から選ぶということは、そういうバックグラウンドの人たちだということなのです。

(木村) そこに関わって生活している人たちなのですよ。だから、そもそも生活感覚が本当に違うのですよ。だからある意味では、生活感覚が違うということをお互いに理解しておかないと、議論にならないかもしれないですね。

—— ひとついいですか。フォーラムを 5 回シリーズでやるわけですよ。そうしたら、最終目的をはっきりさせて、最終的に何かをするということにしておいて、そのために「市民が専門家を使う」という、そういう市民のあり方というのはないでしょうか。

(木村) それでもいいですが、オープンエンドとクローズエンドの議論をする必要があります。「フォーラムの目的設定」に、オープンエンドかクローズエンドか、と書いてありますけれども、オープンエンドだったらありえないです。クローズエンドだったらあるかもしれないけど、その後、どうやって社会にちゃんと訴えていけるチャンネルを持っておくかというのが、今度は参加する意思に関わってきてしまうので、その場合、そこまで調整しなければなりません。

—— 学会員から選ばれた人は、学会ということで、ひとつの社会を作りうるわけですよ。10 人が固まりうる。一般参加の市民が、同じような、何ていうのかな、対等になるために、やはり「何か」がないといけないような感じがするのです。

(木村) 市民がまとまる必要はないのですよ。

—— 個々人でもいいのですけど。専門家を利用できる、市民にもメリットがある、と謳うことはできないでしょうか。フォーラムに参加することで、市民は専門家を利用できる。そういうメリットを作るのが、意外といいかな、という感じがしたのですけど。

(木村) その場合、専門家のメリットは何でしょうか。

—— メリットがないと、市民は参加してこないということですか。

—— あまり、したくないかと思って。5 回やって、何が得られるかといったら、例えば研

究に参加できたということ、その研究成果に自分も参画できた。そういうことはあるかもしれないけども、実際に自分に何が得られたかということを考えて場合に、市民が専門家をうまく利用できるという、そのノウハウを身につけるとか。そういうメリットがあったほうが参加しやすいかな、という感じがしたのですね。

(木村) 皆さん、どうですか。

—— 利用できるという発想はあまり、思いつかないというか。

—— 具体的には、例えばどんなことですか。いつでも電話して答えてもらえるとかですか。

—— 専門家は、専門家のネットワークがあるし、知識がある。その専門家の知識やネットワークを利用して、自分たちが、例えば原子力関係の倫理というのはどのように考えられるか、というのを、そういう知識やネットワークで、自分で構築できるかとか。そういう利用の仕方。違うのかな。

(木村) いや、利用というところにメリットを求める必要はなくて、むしろ、こういうところに参加するメリットにはどういう種類がありますか、という議論をしたほうがいいと思います。

—— 市民の側から見て一番大きなメリットは、こんなスケールの大きな研究に自分も参加できることですよね。

—— 名前が残る。

—— まあ名前は残らなくても、その研究の一員として自分も参加できるということは、すごくうれしいけど。でも、そういう興味本位な人間ばかりではないからね。

—— 違う人もいると思います。でも、自分では会えないような専門家に会えること自体が、私だったら魅力的です。

—— 私たちはそうだけど、一般サラリーマンの、忙しいお父さん方にしたら、土曜日の半日くらいを割いて、これに5回も来るメリットがあるか、ということですよ。

—— 意見を思い切り言えるとか。

—— ああ、それはあるよね。

—— 自分で言ってみたかったとか。

—— でもそういう方ばかりではないから。

—— やはり専門家と話す機会というのは、講演を聞くのが一般的で、それはチョイスして行けるけど、コミュニケーションがとれますよ、というのはとても魅力的だと思うのです。それから、いろいろな専門家がいるとなったら、もっと聞きたいことがあるのにいつもは聞けないけど、聞きたい、という人は来る。

　　だけど、そうではない人、聞きたいと思っていない人に対しては、どうすればいいかわからない。そういう人に対して、やはりもうひとつ「何か」があると、いろんな人が集まりますよね。

—— そうなのです。もうひとつ何かがあると。

—— 謝金は出ますか。

—— 謝金は出ます。

—— お金が出るなら、それが一番のメリットだと思う（笑）。お小遣い欲しいというお父さんだったら、一番メリットだと思う。

（木村） 謝金はありますね。謝金の額もきちんと設定しなければいけませんね。

—— 謝金ももらえて、好きなこと言えるんだもんね。

—— お金のことは、表向きは絶対誰も言わないと思うけど、魅力はあるでしょうね。

（竹中） 戻っていいですか。今までも、原子力の知識を、専門家から話すという形の講演会はたくさんあったわけですよね。それでも、そういったところとは違った発想とか、感覚に何か違いがある、と感じられるということですよね。

—— 市民がですか。

(竹中) はい。

—— はい。もちろん。

(竹中) つまり、同じ情報があったときに、それに対する解釈の仕方が違うということですか。

—— いや、違う。

(竹中) 解釈の仕方ではないのですか。

—— 生活感覚なのではないですか。

—— やはりそうなのかな。

—— 原子力の先生方は、原子力というものを理解した上で、研究に携わって、生活の糧にしているというのもあるのでしょうかけれども、一般市民からすると、原子力というのはものすごく漠然としていて。例えば、原子力といたらイコール原発とか。

—— だから、平和利用なんて、具体的に思いつかないわけでしょう。

—— 放射線は医療の面で活用されているかもしれないけど、だけど「原子力」といったら、「原子力発電」になってしまっただけ。「原子力発電」の後には、このあいだみたいな事故が起こって、大量の放射線を浴びて、人が死んじゃったり、けがしたりするとか、そういうマイナスイメージしかないから、反対する人はそういうほうへ感覚がいくから反対になるし。

原発の推進派といわれる方は、いろいろな制度的なものがあって、交付金があるとか、地域が発展できるのではないかとことを狙って推進派になったりするわけですね。

だから、何て言うのかな、政治や何か、国の行政と結びついて、何か利害を産む組織、そういう社会として原子カムラを捉えていると思うから。そういう長年の原子力というものに対するイメージがあった上に、このあいだの事故だったから、だから本当に、もう理屈ではないというか。言葉で説明しきれないのですけど。

—— 以前、最後は好きか嫌いかで決まる、という話がありましたよね。

(木村) ありましたね。

—— だけど、私も最近いろいろ記事を読んだり、報道を見たりしているのですけれども、原発と一口に言っても、日本にある原発も 1 つ 1 つタイプが違っていたり。これからもしかしたら、ものすごいお金をかけて共同研究して、放射性廃棄物を出さない原子炉を作る研究をするとか。何かいろいろしているという話は聞くのだけれども。だから、ちょっとね。

でも、こういう話が本音でできたら、専門家の先生方にも、一般市民の感覚を知るというのはメリットにならないのだろうかと思うのですけど。

この研究は、題名が原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション、ですよ。だから、話すことにはきっと意味があると思うのですけど。

(木村) 専門家のメリットは、専門家としては、どうですか。

—— でも意外とその境界が低くて、あると思っていたけど、なかったのかもしれないとか、最近自分でそう思ってきた。勝手にそう思っていたのかしらって。

—— こっち側（市民）が作っているのでは？

(木村) この委員会にいる先生方は、できた先生方が多いので。

—— それに、ここに参加している私たちも、いわゆる一般市民ではないと思うのです。講義も聞いているし。普通の人よりは、ですけど。

—— でも、選ばれた 10 人が、私たちより詳しいかもしれない。どういう人が来るかは分からない。

(木村) でも、確かに関心のある人しか来ないはずですからね。

—— 結構勉強していると思いますよ、そういう人は。

—— 原発とか放射線を、この事故がある前でも、自分のところではないからいいのだけれども、危険なものとしてずっと捉えてきたという下地とか、それから「100%安全じゃないと駄目」と思っていたりすると、すでにそこで、いろいろなことを聞いても、解釈の違いが存在するのですよね。反対の人といくら話をしても、そこが絶対に埋まらないので。私は、ここで落としどころでこうしました、と言うのだけれども、その人の落としどころはゼロなので。

—— そういう会話をすると、私は専門家にメリットあると思いますよ。原子力の専門家が考えているロジック、シナリオというか、そういうものがいかに市民感覚とずれているか。市民はそういうものに対して、どういう拒否反応を持っているか。あるいは、意外とそうではなくて、専門家が過剰に考えているところも見つかるかもしれないし。そういうところもあるかもしれない。

例えば、専門家の間でかなり昔から言われている「一般の人はこういうものだ」というイメージがありまして。その代表例が、イザヤ・ベンダサンが書いた「日本人とユダヤ人」という本です。

ユダヤ人は、その本曰く、ニューヨークで高級ホテルで生活している。安全というのは、そのくらいお金をかけてもいいくらい重要だという、ユダヤ人はそういうリスク感覚を持っている。日本人は、今ゼロリスクというご発言がありましたけれども、リスク感覚が世界の中でも特殊だと。「日本人とユダヤ人」という本に、ユダヤ人と日本人はリスクに対する感覚が、極めて特殊だということを書かれていました。

それを、内田先生という原子力の昔の大家の先生が引用されました。日本人は、ゼロリスク感覚が非常に強いから、原子力も事故が起きるなんていう話を持ち出すと、市民から受け入れられない。だから、絶対に事故が起きないという説明をしないと駄目だと。

欧米では確率論という手法が使われて、リスクがどのくらい低くなったら大丈夫、という考え方が、今は欧米ではどの国でも使われているのですが、日本は内田先生がイザヤ・ベンダサンを持ち出して以来、何十年も前です、私は大反対なのだけど、リスク論が使えない。ゼロリスク感覚が強い。

私は、そんなばかなことはないと思っています。浅草に行つてごらんと。お化け屋敷が繁盛しているのではないか。ゼロリスク感覚だったら、お金払ってまで、あんな怖いところに誰が入るものか。ディズニーランドでも、ホーンデットマンションが大繁盛している。富士急ハイランドに行つてごらん下さい。いつ事故が起こるか分からないようなジェットコースターに、お金をわざわざ払って、長蛇の列で、もう大繁盛していますよ。誰だってリスクは少ないほうがいいに決まっているのだけど、車だって事故が起きるのは分かっているけども乗るし。

—— 自分が乗るときは事故が起こらないと思って、乗っていると思います。

—— 飛行機だって落ちる可能性があるのは分かっているけども乗るわけですよね。

—— 今、原発を存続させているものの分け目は、たぶん電気のことと、社会の全体を見て、こうなると電気料金がものすごく上がりますよとか、ここはこうなりますよとかという、どのくらいまで情報があれば、自分たちはゼロリスクだと思っているけども、その原発よ

り…例えば車を利用するのは、車の事故率よりも自分の便利さを選んでいるわけですね。事故率が少ないと思っているから、便利さを選んだわけですね。

すると、原発の事故率もすごく少ないと言っているのだけれども、嫌だ、駄目だとなるのは、他にそれと比較して、自分の身近になるものの全体像が見えていないから、これだけの話をすると、絶対に嫌、絶対にやめて、という話になると思うのです。だから、何かもう少し、自分で選べるというのかな、ちゃんと原発の話とかも、きちっと客観的に見れるような情報を、どこまで条件を広げればいいのかなくて。

—— やはり情報の提供の仕方が十分ではないという意見があつて。今回、国が革新的エネルギー・環境戦略を作つて、30年代に原発ゼロにしようという方針を作りましたけれども、三択で、0%と15%と25%と、どれがいいとやったときに、情報の開示があまりにも少ないと。まさに今おっしゃったとおりです。

我々原子力界の人間は、あまりものを言える立場ではなかったのが批判もあまりしませんでしたけれども、では火力発電や再生可能エネルギーに、そういうリスクがどれだけあるかという比較をすると、実はすごく大きくて。今は事故を起こした直後だから、原子力の人間が他の発電システムのリスクのことをあげつらうのは不謹慎だと思うので誰も言わなかったけれども。

「不都合な真実」という本が出ています。その中には、そういったことがたくさん書いてあります。火力発電は、SOX、NOXを大量に出します。それで何百万人という人が世界中で毎年亡くなっている。やはり発電所から出るSOX、NOXが相当大きな寄与をしているというのは、学術的に言われていることです。だから、温暖化だけではなく、油を焚いて発電するというのは、できるだけ減らそうと。

スウェーデンは、だから絶対に火力発電は増やさないと。1986年に、今の日本よりももっと過激な脱原子力、住民投票で原子力をやめましょうという宣言をしたのです。そのときに12基の原子力発電所を持っていたのですよ。チェルノブイリの事故が起きて、もう原子力は嫌だと言って、やめた。バーシェベックという、一番デンマークに近い、デンマークは原子力が嫌いで原発を持っていない、その国境に近いところにあった発電所は、すぐに廃止にしたのです。その1基だけを廃止にした。

そのときにスウェーデンが偉かったのは、歯を食いしばってでも火力は増やしませんと。それは、地球を駄目にしちゃうから。健康にもよくないし、温暖化のガスもあるし。だから、再生可能エネルギーで原子力を置き換えていきますと。これはだから、ほとんど日本の今回の政策と近い政策を選択したわけです。そして、歯を食いしばってやってきた。

ところが、2010年に何を決めたか。これも国民が選んだのだけど、原子力の新設を認めただけです。(福島)事故が起きた後も、私はスウェーデンに行ってきましたけれども、その方針を変えていません。再生可能で置き換えるのは無理だということに気がついた。もう、風力発電だらけです。目一杯建てている。それでも全然無理だということが分かりました。

あれだけの広い国土で人口 920 万人しかいない国で、いくらでも土地があるのだけれども、風力も太陽光も、無理だということに気がつきました。それは、明らかなのです。風力も太陽光も、日が翳ったり、風が止まったときには、火力発電でバックアップしないと駄目ですから、火力発電がどうしても増えてしまう。だから、これ以上再生可能を増やすと火力発電を増やさなければいけない。だからやりません。やはり原子力しかありませんと。

その代わり、原子力発電所の安全性を猛烈に高めています。冷却系も、日本は 200% しかない。100% に対し予備が 100%、200% しかない。スウェーデンはその後、3 年とめて改造して、400% にしている。行ってびっくりしました。それだけ原子力の安全性にお金をかけて、事故の確率を低くして、これだけ安全にすれば、再生可能で火力を建てるよりはずっといいという選択をした。だから私は、そういう道を選んでいく可能性があると思っていますのです。

—— こういうお話が聞けるなら、フォーラムに何回でも出たい気がします。

—— だから、いくつか危惧していることも、それに乗せればいいですよ。

(木村) 今までの議論を踏まえると、「社会的なリアリティ」が、どうもポイントになりそうなので、ここを共有することが必要ということでしょうか。

—— 何で共有するのが一番いいのか。

(竹中) 少しいいですか。先ほど「解釈の違いではない」と言われたときに思ったのは、専門家も元々は一般市民だったところから、専門家の道を歩もうと考えたわけですよ。それは、その人が根本から何か変だったということですか。

—— いや、変だなんて思っていないですよ。

(竹中) いや、変というか、

—— 差異がある？

(竹中) どこから差異が生まれているのかということです。一般市民の感覚、という書かれ方をされているのですけれども、その感覚から言うと、原子力の専門家を志すことは、理解ができないということですか。

—— いや、そんなことはないです。

—— 一般市民もいろいろいますよ、だって。

—— いわゆる一般市民の人を100人引っ張ってきたら、皆おっしゃること違いますよね。

—— 自分たちでいろいろ研究して、いいものを社会に、と考えて、専門家になられると思うのですよ。だから、安全だと思っていないとかではなくて、安全でなければ、安全を追求しよう、もっと違うものがあれば、何かそれに対処できるものを考えようといって、専門家になると思うのですよ。

でも、市民は、やはり自分の身に引き寄せてしまうと、平和利用とか何とかではなくて、安全とか、安全ではないとか、そういうところで考えてしまうから。そこに違いが出てくる。

—— 科学者の人は、自分が研究を追及していった結果、何かそういう利用の仕方に安全だとか、危険性があるとか、そういうことが出てくるかもしれないけど、最初のとっかかりは、ただ興味だと思うのですよ。

—— おっしゃるとおりです。私が中学生の頃、鉄腕アトムにあこがれて、それで原子力の道を進んだのですよ。原子力をやっている人は、多かれ少なかれそんな感じで。好奇心というか。

(木村) 私は違うのですけどね。興味ではなくて、実家がガソリンスタンドなので、30年後にはつぶれるから、何か違うことをしなければいけないということで、ああ、エネルギーだったら、今は原子力だ、ということで原子力にいったのですよ。(動機が)変わっているらしいですが。

まあ、それはいいとして、社会的リアリティを共有することが大切、ということでしょうか。

—— だからどういうテーマで、リアリティの、まず違いを分かることに、

—— 分かり合えばいいわけでしょう。

—— 違うんだ、ということ。

(木村) やはり、それを最初に入れるべきでしょうか。私たち観察者の目的を達成するために、ポツの3番目が一番ポイントかなと思っているのですけれども、「お互いの解釈・

思い込み（これがいわゆる「社会的リアリティ」）が違うのだということに気づく」ということだと思うのですが、そういうところを分かり合うような話を、どこかに入れる。最初に入れるのがいいのでしょうか。そうすると、もしかすると相互作用が見えるかもしれない。ムラがないかもしれない。そういうことでしょうか。

—— 私は、ムラの中のそういうグラデーションをつまびらかにすることも興味深いけれども、市民のほうのグラデーションもつまびらかにすることも大切だと思いますね。

（木村） グラデーションというのは、何に対してのグラデーションですか。

—— 原子力問題に対してのグラデーションがどうなっているのかというのは、個人的な関心事のひとつではあります。

—— だから、本当に違う人を10人集めることが大事ですよ。

—— できるだけ違う、広範な人選ができるといいなど。

（木村） そうすると、原子力の話題を入れるということはそれでいいとして、1回目に、まずはリアリティの共有がないと、議論にならないということですね。それをどういう方法でやるかは、少し考えなければいけないということですね。

第1回目は、「社会的リアリティ」の違いを認識する。そして、2回目くらいから少し原子力の話題をしていったほうがいいのでしょうか。今までの議論だと、安全観とか、好き嫌いとか、その辺りの話題はどうか。あと、話題の切り口として、原子力ではなくて放射線から攻めるのはどうか。あとは、電源の話です。先ほどそういう議論がありました。

まず、候補として、それらをおいておきましょうか。そういう議論をする。それから、もっと人生観的な議論をしたい、みたいな話もありましたけど。

—— 4つの事故調が出ましたよね。国会事故調は、規制が事業者の虜になっていたことが一番根本的な原因であると。

政府事故調は、安全神話にこだわって、要するに事故が起きませんよ、安全ですよということを説明しているうちに、説明者自身も事故が起きないと思いついてきた。それによって、シビアアクシデント対策という、事故が起きたときの対策が非常にいいかげんだった。これが今回の事故の最大の原因であるというのが、政府事故調の説明です。

東電事故調は非常にはっきりしていて、私たちは国が決めたルールを全て守ってきました。だけど、国で決めたルール以上の津波が来てしまったから、事故になったのですという、裁判を意識して、非常に明解な自己弁護の報告書になっている。

民間事故調の説明は、原子力の安全は、深層防護を 5 段階にやるのが国際基準なのに、日本はそれを 3 段階までしか説明をせずにやってきて、4 段階目のシビアアクシデント対策をやってこなかったことが失敗です、という分析をしています。

私はその中で、政府事故調の「安全神話にこだわっていた」。これを、専門家も市民の人も、どう思うか。これをテーマに議論したらどうか、と思います。「安全神話」、先ほどの話にあったゼロリスクとか、いろいろな言い方があるのだけど、その安全神話に対して、民間事故調がいつている「深層防護」は、事故は起きるという前提で安全対策をしなければいけないという考え方です。そうすると、事故は起きますということを最初に言わないといけない。

—— そうですね。

—— そんなものが日本で受け入れられるわけがないだろうと。だから、深層防護をまともによったら原子力発電所なんか建たないよという議論が、専門家の間であって。

(木村) 私は、安全神話に関しては、かつての日本の国家プロジェクトだったと思っています。国家的トリックとして、結局業界と国民と政府が一体となって、安全だという風評を作り上げた。これが安全神話だろうと。

—— それはやはり、国民がそれを歓迎するであろうという土台があったわけですね。

(木村) そういうことです。国民も。だから、原子力をやろうという、ある意味では国全体で作上げた虚像だったのだらうなというのが、私の安全神話の理解です。

—— 朝日新聞などにすっぱ抜かれて有名になりましたけど、安全委員会の委員長を務めておられた鈴木篤之先生が、深層防護の考え方に従って防災対策を、今回まさにずさんだったその防災対策を見直さなければいけないということを提唱されて、専門家にそういう検討資料を作らせたのですよ。そうしたら 2006 年 5 月 24 日に、安全・保安院の院長を務めていた広瀬研吉さんが、「寝た子を起こしちゃ困る」と。やめてくれと。それで、防災対策見直しをやめてしまった。

そのときに、広瀬さんが言ったのが、「寝た子を起こすな」でしょう。それは何を意味しているかという、安全神話のことです。要するに、事故は起きないということで地元の説明してきたのに、深層防護で事故が起きることを前提とした防災対策を検討するなんていったら、大変な騒ぎになると。だからやめてくれと。

会議が始まる前に紹介した班目さんの本を読むと、班目さんは、委員長になられて真っ先にそれをやらなければいけないと言って、それを始めていました。その作業の大方針を 3

月 16 日に大々的に打ち出す予定だったということが本に書かれていましたけれども。その直前に 3.11 が起こったということですね。

だから、安全神話に関わる話を、本当に市民の皆さんがどう思うのか。先ほどの内田先生の話にしても、事故が起きるということを言ったら、もう原子力発電所は建たない、ということで、それで安全対策がすごくいびつになってきたわけですよ。それがやはり事故の根源的な原因ではないか。

ぜひ、このフォーラムの中で、そのディスカッションをしていただきたい。フォーラムで皆さんの意見を聞くことは、専門家としてもとても意義のあることだと思います。

(木村) それをやれば、安全神話の中身だけで論文が書けますからね。だから、いい話題だと思います。

それから、今の安全神話は、東電や国が作ったものだということで、押し付けられているような気もするけれども、やはりそれを認めてきた国民もずっといて、

—— そうですよ。そこですよ。

(木村) 被害者と加害者が両方一緒なのですよ。

—— だって、立地の地域にしたら、住民の人たちがそれで納得しない限りはできなかったわけで。

(木村) だからこの辺りの話題は、私は結構気になっているところです。「安全観」と挙げましたが、「安全神話」のほうが分かりやすいから、そうしましょうか。これは面白い話題ですね。

—— 原子カムラの人たちが「地域の住民もそう認めたんだ」と言うと反発が来るけど、市民の側から「やはりそうだったのではないか」と言うことは大事ですよ。そんなこと言わないけど。言ったら地域の人に石を投げられるけど。でも実際はそうですね。

—— 安全神話の中で、もう少し具体的にすると、リスクというものをどう捉えて、活かしていくかということ。今回の地震と津波で、要するに大きな地震があつたら、津波があるだろうがなかろうが、皆てんでんこで逃げようというのは定着したではないですか。だから、リスクをどのように受け取って、実際に活かしていくかということが、少し両方で共有できれば、専門家もリスクを前面に出すことに怖さがなくなり、受け取るほうも、そのリスクを受け取っても、ただ怖いだけではなくっていくのではないかと。

(木村) 私の予想ですけど、そういうリスクの管理に関わることは、専門家は、「俺たちにやらせてくれよ」と言いそうな気がします。本来はリスク・コミュニケーションとかリスクガバナンスの議論は、今おっしゃったような話なのです。リスクの情報を出して、どうやってこのリスクを社会として管理していくか、そういう議論をするのがリスク・コミュニケーションだけ。

でも、おそらく専門家は、自分たちのほうがリスクに対して情報を持っているから、自分たちでリスクを管理するのが当たり前だ、みたいな考えがあるのではないかな。だから、市民参加、という枠組みになっているのですよね。

そこをうまくやらないといけないのだけど、本当はそこまでトピックを進められれば、どうやって実際のリスク・コミュニケーションのステップを踏めるかという実験ができるのだけれども、少し怖い気もします。失敗してしまう可能性が高いので。

今回はそういう意味では、最後に少し触れるくらいはいいかもしれないけど、いきなりメイントピックにしてしまうと、ついていけないかな、という気もしたりします。

—— 市民の側のリスク・コミュニケーションというと、おそらく福島の事故が起きた後の話になりますよね。先日、ある講演会を聞いて分かったのだけど、リスク・コミュニケーションは事故が起きる前にするべきものであって、事故が起きてからするのはリスク・コミュニケーションとはいわないそうですね。

(木村) クライシス・コミュニケーションです。例えば、福島で起こったことを福島で対応するのはまだクライシス・コミュニケーションかもしれないけど、そこから順次復活していこうというのはリスク・コミュニケーションだし、他のところに知見を展開して、リスクをちゃんとやっていきましょうというのはリスク・コミュニケーションです。

—— そういうことすら私たちは、このあいだまで知らないで、リスク・コミュニケーションという言葉を使っているわけですよ。だから、そのくらい情報に差があるということだと私は思うのですよ。

(木村) そちら側の情報もないでしょうね。というか、リスク・コミュニケーションの情報ですら、専門家はほとんどもっていないですから。リスクガバナンスとか全然分からない。

リスクというテーマをどう扱うかは、少し考えたいと思います。

では、次にいきます。フォーラムを実施するための工夫としては、参加者にファシリテーションしてもらおうという案が出ています。これは面白い工夫だと思いますね。これはもう少し具体化してやっていきたいと思います。皆がファシリテーションをする。それによって、自分の意見を言わずに、誰がどういうことを言っているかということが分かる。自

分も、誰かから言われると、自分の言葉が通じないことに気づく。そういう観点かなと思います。

それから、メリットの議論がありました。今まで挙げたもので、もう十分でしょうか。謝金がやはり大きいですかね。フォーラム1回が、3時間だったかな、だから時間単価はどのくらいになるかな。

—— 結構長いですね。

(木村) 今、この会議は2時間ですね。

3時間とか5時間とか、その辺りの設定も考えなければいけないなと思っているのですが、謝金も考えないといけないですね。1回1万円くらいでしょうか。

—— 1万円でも、十分だと思います。

—— 十分ですよ。

(木村) 謝金については置いておいて、もしかすると、学術的にちゃんと成果をあげて、例えば原子力安全神話なども分析して、しっかり学術的に落としていきますし、公開していきますとか、そういうことをメリットとして掲げたほうが、むしろいいのでしょうか。

—— プライドが満足しますよね。

(木村) あと、このプロジェクトの1サイクルは、フォーラム5回と、シンポジウムが最後に1回あって。シンポジウムは、フォーラムで話し合った話をまとめて、一般向けに、公開の場で話す。できればプレスリリースもして、メディアも呼んで、参加者も大勢呼んで、行なうような場にしたいなと思っているのですね。そこまで華々しくなるかどうかはわかりませんが。

シンポジウムには、フォーラムの参加者は出なくていいのでしょうか。ぜひ出たいという参加者を、フォーラムのときに決めて、出してもらったほうがいいのでしょうか。

—— 最終のシンポジウムに出たい人はぜひ出てほしいということ、あらかじめ言っておくといいのではないですか。

(木村) あらかじめ言っておいたほうがいいですか。でもそうすると、シンポジウムで何をやるかが分からない。だから、5回出てきてもらって、

—— 5回目に聞いたらいいのではないですか。何月何日にシンポジウムをやるけど、そこに出てくれますかと。

(木村) パネリストとして出てくれませんか。

—— 今まで参加してきた人が、自らの言葉で話すほうが、ずっと伝わりますよね。全員じゃなくてもいいけど、市民の何人か。

(木村) そうです。全員出たいってなったら、どうしましょうか。並んでもらいましょうか。

—— そうしたら、全員出してもらって、そのうち発表は、その10人の中から誰かに決めてもらうとか。

—— そうそう。出たいという気持ちは阻止しちゃいけないと思います。

—— それは謝金の予算はあるのですか。

(木村) うーん、どうでしょう。

—— それはなくてもいいと思う。

—— 謝金はないけど、自分の意見をきちんと言いたいです。

(木村) それで、メディアとかもちゃんと呼んで、そういう形でやりたいと思っています。

—— メディアだけではなくて、フォーラムの成果を社会に反映したいと思っている人が多いと思うのですよ。だから、やはり国の担当者とか、関わっている人が来て聞いてくれるというのが、ひとつのメリットかなと思います。

(木村) そうですね。だからフォーラム参加者を募るときにも、最後にシンポジウムを開いて、フォーラム5回で話し合った成果は、社会に大々的に発信します、ということをちゃんと言ったほうがいいですね。

—— そうそう。メリットのひとつ。

—— それで、そのシンポジウムまでを来年度にやるのですね。5回のフォーラムとシンポジウムを。

(木村) やります。

—— 面白そうですね。市民の10人になりたいな。

(木村) ということは、今のようなことを言ったら、それなりにメリットになるということですね。

専門家側はどうですか。市民の考えが分かるなどが挙げられていますが、そういうのを知りたい人というのは、意識の高い人たちですよ。

—— そうですね。専門家のほうが問題かもしれない。

—— 専門家を意識付けするのは確かに難しいかもしれない。

—— 専門家は、どういう方を想定するのですか。

(木村) それはまた後の議論になるので、少し検討しましょう。

そうすると、フォーラム全体の概要みたいなものが少し見えてきたので、少しまとめて、こういう意図でこういうことをやりたいですということを、12月7日の全体会で発表したいと思います。

次にアンケートの内容に入りたいのですが、2時間経ったので、少し休憩にしましょうか。では、5分くらい休みましょう。

(休憩)

(木村) それでは再開します。アンケートについてです。社会調査グループでどういうことを考えているかということ、従来どおりにアンケートは実施します。500名規模のアンケートで、今年はできれば、市民と専門家でまったく同じ内容にする予定でいます。(従来は、ほとんど同じだが一部に違いがあった)

本調査票は、誰が答えたか分からないようにしてあります。こういう調査をやるときに、倫理的配慮が重要になってきます。ですから、本調査は、個人と紐づけないのです。一方で、フォーラム参加を募るアンケート(別紙調査票)は、参加してもらうので個人と紐をつける。

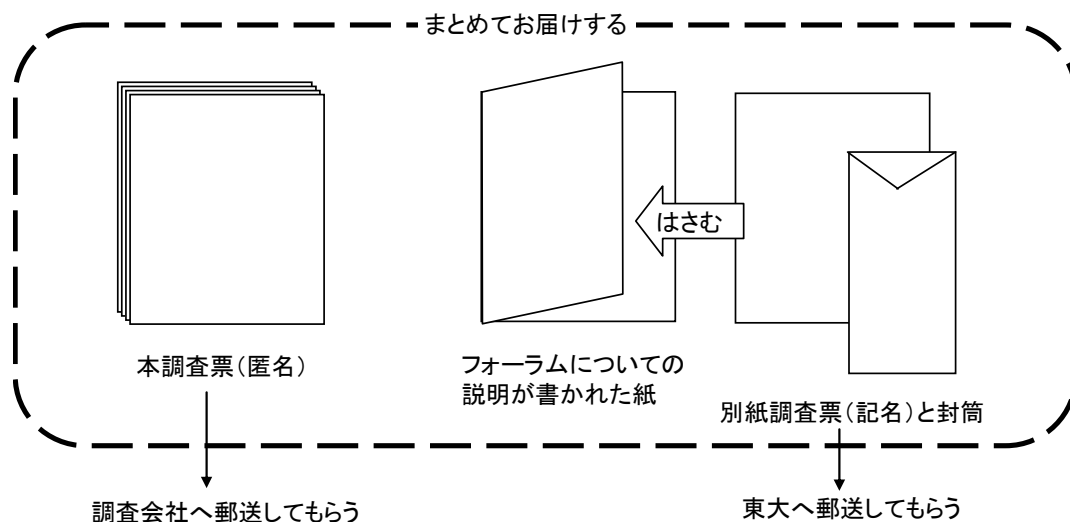
本調査票の最後のページに、参加してくれる人はここに書いてください、という形式にしたほうがシンプルなのですが、そうすると、誰が回答したのか紐つけられてしまうので、それはやめよう。なので、少し面倒だけれども、本調査票と別紙調査票を分けて、本調査は調査会社が回収するのだけど、別紙調査は東大に直接郵送するという形で、封筒を用意していれておくと。こういう形式を取るということで考えています。

本調査票の中の一部を取り出したものが、別紙調査票になっています。この他に、A3 二つ折りの説明書（フォーラムについて説明した資料）を作り、その中に別紙調査票と封筒をはさんで、回答者に渡すのですね。それで、資料を開くと、封筒が出てきて、別紙調査票が出てきて、その挟んでいた A3 の紙を見ると、フォーラムに参加してくださいという勧誘の文章が入っている。こういうスタイルを考えています。

—— 本調査票と別紙調査票は同時に送るのですか。

（木村） 同時に送ります。同時に送って、本調査は輿論科学協会に出して、別紙調査は東大のほうに出す。そのように分けておきます。別紙調査はそんなに来ないと思うのですが、500 だから、50 くらいかな、多くて 50 かなと思います。専門家のほうはもっと少ないのではないかという勝手な予想がありますが。

別紙調査票は本当に情報と紐つけてやるので、ちゃんと倫理的にも配慮していますとか、そういうことを書いて、別途お願いをするようなアンケートになると思っています。



—— 倫理上問題なのは、相手方に対して配慮するということを行うだけではなくて、集めた情報をどのように扱うかというところが一番問題なのですね。

（木村） そうです。そういった点もきちんと書かないといけません。

それで、別紙調査票の案（F2-4）を見てください。ここを書いてもらうのですが、表面と裏面があって、表面は氏名、住所、電話番号、メールアドレスが書いてあって、その後性別、年齢、学歴、職業を聞いています。これは本調査票（F2-5）の11ページと同じ情報を聞いているのですね。

裏返すと、Q5が原子力発電への関心。Q6が利用に関して。Q7が安心か不安かということ。Q8が経済的に発展ができるかどうかという話。これは、本調査票の4ページのQ10、11、13、14と同じです。Q9は、本調査票の10ページの項目と同じになっています。

今のところ社会調査グループでは、関心と、利用と、安心不安と、経済発展、いわゆる物質的に豊かになることと原子力をどういう関係で思っているのかということ、この4軸と、あとは性別年齢などがあれば、どういう人なのか、最低限のところは分かるのではないかと、こういうアンケートにしています。こういう観点からの意見を聞いておきたい、というのがあれば、こちらからの要望事項として向こうに出すことができるので、その辺を少し聞きたいと思います。

（竹中） どういう基準でフォーラムメンバーを決めるかという議論をするのではないのですか。

（木村） いや、そういうことです。どういう基準で決めるのかを検討する材料として、このアンケートを出しています。社会調査グループは、このくらいの基準があれば決められるのではないかと、ということを書いてきているということです。

でも、市民は男女で分けるので、例えば、男女と賛否だったら、それで4パターンできるわけです。もう1つ項目を入れると8パターンになる。それでほとんど終わり。そういう分け方にするのか。それとも、例えばQ6の利用をチョイスして、5つの選択肢があるので、それぞれ男女1人ずつで10人にするとか。そういう分け方もありますよね。その辺をどうするか、少し検討しなければいけないということです。

あとは、全体の統計的な分布は、本調査を分析すると分かってきます。本調査と別紙調査の項目を照らし合わせると、その人がどの辺りにいる人なのかをみることができます。

議論しなければならないのは、どの基準で決めるかということ。それから、フォーラムをしていく際に、ファシリテーターは参加者についてどのくらい情報を持つておくべきなのかということです。その2点で、別紙調査の内容を決めたほうが良いというので、意見をお聞きしたいということですね。

—— Q5からQ8は原子力発電について聞いていて、Q9だけ原子力という広い聞き方をしていますよね。これはなぜですか。

（木村） Q9はムラを意識しているのです。「原子力に携わっている人たちや組織」とい

うのは、我々の研究で言うところの「原子カムラ」というイメージです。「原子力発電」に関わっている、ではないのです。「原子力」なのです。そういう差を作っているのです。

「原子力発電に携わっている」というと、働いている電力業界の人とかになってしまうので、そうではないところまで、こちらでは意図して含めているということです。

だから、明確にするなら「原子力業界」と書くとか。でも原子力業界と言っても、先ほどの議論だと、「原発だよな」となってしまうから。だとしたらどういう言葉にしたらいいか。「ムラ」とは言えないですからね。

—— 曖昧感があっていいと思いますけど。

(木村) 曖昧感を出すために、「原子力」で切っているのです。

—— Q8 なのですけれども、「原子力発電がなくても、日本は経済的に発展できると思いますか、それとも発展できないと思いますか」のほうがよくないですか。「それとも発展できるとは思いませんか」という言い方は、違和感があるのですけど。

(木村) では、そうします。向こうで作ったときにも、変だと思ったのですが、何のコメントもなく、私が勝手に変えられなかったのです。

—— 皆さんはどう思いますか。

(竹中) 右の選択肢にも「発展できない」と書いてあるのに、という感じですよ。

(木村) そうです。対応していないなと思ったけど、時間がなくて。向こうでも 4 時間ぐらい議論してこれをつめたので、最後は皆疲れていたのですね。

—— 非常に細かいことなのですが、Q6 に、「してゆく」と書いてあるのだけれども、「ゆく」と「いく」と、どちらが正しいのだろう。

(木村) ずっとこの文言だったので、変えないという、そのぐらいのものなのですが。これが「い」に変わったから有意な差が出るとは思えないのですけど。

—— 表記は本当は「い」だと思いますけど、発音は「ゆ」ですよ。

—— 「行く」をひらがなで書いているだけだから、「い」ですよ。

—— Q9に、「何も考えていない」という選択肢はないのですか。

(木村) どういう聞き方をするかというのは、社会調査の人たちとの議論もあるので、全体会合で行なうべきですね。こちらでこうしたいといっても、社会調査グループと調整とれないとまずいので。

でも、ひとつポイントとして入れておきましょうか。「何も考えていない」。

—— 「特に何とも思わない」。

—— Q9は、選択肢が負の印象ばかり並んでいるように見えるのですが。1番以外は。

(竹中) 5番もプラスではないですか。

—— 5番は同情だと思うのですが。

—— 「自由が意見が述べられない」というのは、要するに、本音を言っていないね、という意味でしょう。だから、何かネガティブなイメージですね。2番もネガティブ、3番もネガティブ、4番もネガティブ、誘導尋問みたいなのですが。

(木村) これは、逆問題が作れないのですよ。

例えば、「そもそも原子力は道徳的に問題がある」を反対にしようとする、「原子力は道徳的に問題がない」、「そもそも」という文言が切れてしまう。これは「そもそも」を入れておかないと議論にならないのですよね。そういう感じで、なかなか難しいのです。

選択肢の5番、6番は同情なのですけど。要は、人ではなくて、組織に問題があるという、そういう議論です。

—— 「特定のイメージは持っていない」という選択肢があってもよさそうですね。

—— でも、1つも丸をつけないという選択肢がありえるわけですよね。どれも当てはまらないなと思ったら、つけないことができるなら、私はこのままでいいと思います。

(木村) でも確かに、「特定の印象を持っていない」を入れておけば、そこを見れますね。

—— その人のこれからの、今までかもしれないけど、ライフスタイルみたいなものが分かってあまり意味がないでしょうか。Q8の「経済的に発展できると思いますか」は、やはり電気とかの選択肢のことを考えて書いてあると思うのだけど、この質問が私にとって

は、どれにするか一番迷うところで、この質問でどういうことが分かるのか、それもあまりよく分からないので。

—— CO₂を選択するとか、そういう感じなのですね。

—— いろいろな条件がそろったときに、原発を選ぶか選ばないかというときに、経済も立ちいかないかもしれない。電気代も上がるかもしれない。雇用もなくなるかもしれない。国全体がしぼんでいくかもしれないけれども、そういうライフスタイルでも私はいい、あるいは、そんなのは嫌、みたいことが分かっても、あまり意味がないでしょうか。

(木村) その辺りを、この質問で取り出そうとはしているのですけれども。

—— Q8の経済的に、というところですよ。

(木村) はい。物質的なところ、そういう議論を出せないかなと思って入れているのですね。

—— これで出てきますか。

(木村) やって見ないと分からないです。これも新設の質問なので、それで出るかどうかは、やって見ないと分からないところがあるのですけど。

(竹中) 違う話なのですが、私が一番話を聞いてみたいと思う人は、原子力には好感が持てるけれども、原子力に携わっている人たちには好感はもてない、という人なのですよ。

—— そういう人、いるのですか。

(竹中) いないですかね。分からないのですけど。そういう人たちが一番「原子カムラ」を認識しているようなイメージがあつて。

(木村) それは、これを聞けば分かると思いますよ。

(竹中) どこですか。

—— そういう人は、Q5、6、7で積極的なところに丸がついて、Q9にくると選択肢の2

と3とか、ネガティブなところに丸がつくから。

(木村) その辺りで分かるのではないかと考えているのです。

—— (Q9の選択肢の)5番は、少し同情も入っているのではないですか。

(木村) (Q9の選択肢の)5、6番は、ある意味同情とか、いわゆる「組織の弊害」をとっています。2番、3番、4番は、「人そのものが許せない」をとっています。7番は、原子力そのものがそもそもおかしいということを知っています。そして1番は、実は好きですということをとっていると。実はある程度バランスをとってはいるのですよ。

—— これで、本当にいろいろなパターン出てくるのかな、と思うのです。同じような答えの人ばかり来ないかしらって思ったり。違うかしら。

—— Q8が、私は少し引っかかります。Q5、6、7で質問をして、Q8で経済発展の有無だけを取り出して質問をすることの意味が、どうもいまいち。

要するに、エネルギー問題を多角的に考えている人であれば、例えばセキュリティの問題とか、CO₂の地球温暖化の問題を考えている人とか、いろいろあるわけですよね。角度はたくさんあります。経済性もちろん、雇用問題もあれば、経済問題もあるし、様々なんだけど、油代で毎年3兆円も外に出ていくということ、日本のそういう貿易収支のことを心配する人もいます。経済的な発展、これはGDPか何かのことをイメージするのだけれども、GDPに対してどうですか。民主党は、再生可能エネルギーの産業を育てていけば十分発展していきますよと言っているのだけれど、ここだけを、経済性だけを取り出す意味があまりあるように思えないから、Q5、6、7であぶりだせない何かを聞いたほうがいいのではないのでしょうか。

(竹中) Q8はQ6と連動しているのではないのですか。

(木村) そうです。でも、本調査票を見てください。今日本調査票を用意しているのは、この中から、どういう軸を別紙に入れてほしいかということをお願いしたいのですね。例えば20年後の発電の話を入れてくださいとか、そういうことのほうが実は見たいのです。

先ほどライフスタイルの話がありましたが、原発に関係なく、ですか。エネルギーがなくなると、日本の産業が衰退しても構わない、ということですか。

—— そこまで大きい話のイメージではなかったのですが。

(竹中) でも、それはあぶりだしたいですね。

—— 電気代が上がっても構わないとか。停電するような世の中になっても構わないとか、そういうことかな。

(木村) 電気とライフスタイルを密接に考えている人はあまりいないので、こういう調査だとあまり出てこないのですね。

—— 考えていないというのは誰ですか。市民が考えていないということですか。

(木村) そうです。

—— でも今は、市民も電力のことにライフスタイルのことを考えているのかなと思うのですけど。

—— 考えているかな。考えつつあるかな。

(木村) 雰囲気としてとなると、まだ分からないですね。

—— でも、実際の行動では、ものすごく電気を使っていますよね。買うもの買うもの、電気製品だけを買っていますよね。電気が必要ないものは抑えて、電気が必要なもの、目新しいものを買っていますよね。だからやはり、自分たちがライフスタイルをどうしようかというのは、出てこないかもしれないですね。

—— 答えているときには、自分のライフスタイルの理想論で答えて、実際はやっていないという人のほうが圧倒的に多いのではないのでしょうか。だから、実際に来た人が、答えた意図には合っていない可能性がありますよね。

—— 気持ち的にはこうだけど、実際はできていないと。

—— 子供に職がなくても、停電になってもいいです。そういうライフスタイルを選びます、と言うけど、実際にはそういう生活をしていないでしょう。

—— そう思う。

—— そうですよ。「原始時代の生活に戻ってもいいと思います」と人の前では格好をつけ

てそう言ったって、家に戻ればオール電化の家に住んでいたり。

—— そうか。だから難しいかな。

—— 私は、なぜ原子力が嫌いかが分かる質問がアンケートの中にあるといいと思いますね。例えば、よくNHKなどが言うのは、「トイレなきマンションだから駄目だ」とか。「事故が起きるから」、「リスクがあるから嫌だ」とか。あるいは、「なんとなく恐怖感がある」とか。いろいろあると思うのですね。そういう質問は、本調査票にはあるのかな、ないのかな。

(木村) 一応、本調査のQ15がそういう質問になっています。よく聞かれる意見を集約した形になっています。大きく分けると、こういった議論があって、これらに納得できる、納得できない、と丸をつけていくと、その辺りが全部見えてくる。そういう構造になっているのです。

—— そうですね。Q15が見れると、原子力に否定的な人はなぜ否定的なのかが分かりますね。だけど、これは分量が多いか。

(木村) 多いのです。ただ、もうQ15だけでいいです、という提案もできないことはない。別紙アンケートの裏面はQ15だけで、原子力ムラにどういう印象を持っているかなどは使わない、でも構わないですよ。

—— 嫌な理由にもいろいろなバリエーションがあると思いますが、それに偏りが無いような人に集まってもらったほうが良いような気がします。「生理的に嫌」という質問はないのですか。

(竹中) それは、Q24にあります。ク)「私は、個人的には原子力発電が嫌いである」。

—— 世の中には、こういう人もいますからね。

—— でも好きだっていう人もいますよね。

(木村) 好きな人は、ク)は「まったくあてはまらない」につけるのでしょうか。嫌いではないけど、好きでもない、というのものもあるでしょうし。本当は、嫌いの反対は好きではないとか、そういう議論もありますけど。

—— 関心がない。

(木村) 好きの反対は無関心であるとか、いろいろあるんですけど。

Q24 は昨年度から始めたものなので、今までの傾向は少し見にくいんですけど。赤字は、今年度から追加した設問です。

—— Q24 のシ「福島県の除染廃棄物を自分のところで処分しても構わない」。この「自分のところ」というのは、微妙な表現ですね。

(木村) これはあえて微妙な表現にしているのです。「福島県の除染廃棄物を」という部分をどう解釈するのかとか、「自分のところで」といっても、これは首都圏調査なので、東京とか、神奈川とか。

—— 首都圏を指しているのか、東京都を指しているのか、世田谷区を指しているのか。あるいは〇〇町を指しているのか。

(木村) これはあえてぼかしているのです。その人の、「自分のところ」というイメージで答えてもらうということですね。だから、「自分のところ」のイメージが人によって違うんだけれども、

—— 非常に狭く考える人もいるし、ある程度県とか都まで全部考えている人もいます。

(木村) そうです。その辺りは、このスペースでは書ききれないねという議論になりまして。

サ) は「自分のところで被災地瓦礫を受け入れて処理してもかまわない」とありますが、東京都はもう受け入れると言っているのです、これを聞くときに、「神奈川県や埼玉県でも受け入れるべきだ」みたいなことを入れると、少し違う話になってしまうから、曖昧に「自分のところ」としているのです。

それで、被災地の瓦礫と除染の廃棄物を比較すると、どう違うのかを見たいというのが、これらの意図です。

—— 「自分のところ」を、「自分の住んでいる自治体」にしては駄目なのですか。

(木村) そこまで入れると、サ) の場合は、もう実施しているよ、という人が出てきてしまうということです。知らない人もいるかもしれませんが。そういうところがいろいろありまして。

それから、この調査は、実は首都圏だけではなくて、関西や他の地方にも展開したいと思っていますのです。そのときに使いやすいように作っているのです、それなりに考えて「自分のところで」なのですね。

(竹中) 今回、「社会的リアリティ」の違いを認識するところからまず始まると言っているのですが、そのときに、市民の中で社会的リアリティにある程度差があったほうがいいのですか。

(木村) その場合、例えば職業で変えるとかでしょうか。

—— 年齢、職業、学歴。

—— 学歴はあまり関係ないかもしれないけど、仕事は関係あるかもしれない。

(木村) 文系理系は大きい違いがある気がします。

(竹中) 私も大きい違いがある気がしますね。

—— そうですね。

—— 市民のほうは、私は(別紙調査票の) Q8は、先ほど言った印象を持っているけれども、(本調査の) Q15のほうがいい気がするけれども、専門家のほうは、この質問だとあまり差が出ないのではないのかと思います。

(木村) 専門家は、専門領域を聞くのですよ。領域が10つくらいあって、それを分けるのもひとつの手ですよ。原子力学会といっても、いろいろな分野の人たちがいます。それこそ原子力発電をやっている人もいれば、先ほど話題になった放射線をやっている人もいますし、核融合をやっている人たちもいるので。私みたいに社会的な分野をやっている人もいます。そういう人たちがとれるといいのかもしれないと思っているのですけどね。

(竹中) 先ほどの「専門ばか」を抜き出す質問はどれになるのでしょうか。

(木村) それは、原子カムラの方は皆「原子力ばか」であるという仮定をおくということです。

(竹中) 皆「ばか」であることを前提にして、つれてくるのですね。

—— それは外から見てだから（笑）。

（木村） 確かに専門家は、この質問だとグラデーションがつかないかもしれないですね。

—— （別紙調査票の）Q8の3番、「原子力に携わっている人たちは権力志向だ」。こういう権力志向的な、教条的なもの言いをする人たち、先ほどお話をした訴訟に関わっているような人だと、高圧的にもものを言う、そういう人もいるのだけれども、そういう人は、黙っていると絶対に希望しませんよ。そういう人に手を挙げてもらうのはかなり厳しい。黙っていると、このフォーラムに参加するムラの方は、リスク・コミュニケーションに関心を持って、今、あるいは過去にリスク・コミュニケーション関係の仕事をした人ばかりになってしまうのではないのでしょうか。

—— 知りたいからか。

—— それ以外の人は、一般市民の人とディスカッションなんて、もう勘弁してよと。仕事でも嫌で嫌で仕方がなくてやっている、とか。

（木村） でも、そういう人は来ないですよ。

—— 来ない。だけど、本当はそういう人に入ってもらいたいわけです。

（木村） 本当はそういう人をメンバーに入れたいですけどね。でも、運営側で決め打ちして、あまりに恣意性が高いと、今度は公平、公正みたいな観点で問題になるので、難しいのですよね。専門家は、こちらから依頼していくという手もあります。

—— 別紙調査をやって、回答してくれた中から5人ぐらいは名前で選ぶ。あとの5人は決め打ちで頼む、とか。

—— これを送ってくれる人は、協力の意思がある人でしょう。だから、おそらく黙っていると、原子力学会で5回もこういうところに来てもいいという人は、リスク・コミュニケーションの関係者で、そうするとコミュニケーション・ギャップの低い人ばかりが来てしまう。そうすると、なぜそんなに悪い評判が立つのっていう、そんな感じの人ばかりになってしまうかもしれません。

—— 結局ムラはなかったという結論になるかもしれないということですね。

—— そうです。全然面白くもない話になってしまう懸念があります。

(木村) ただ、1 サイクル目はそれでもこの方法でやるしかないかなと思っています。1 サイクル目から恣意的にやって失敗するよりは、1 サイクル目は人選のところでそういう限界性を明記しておく。

そして 2 サイクル目は、そういうことなので、専門家のほうはそういう意味でバランスがとれるように、逆に恣意的に選ぶと。そうでないと原子カムラを越えるような実験にならないから。そうやって理由をつけないと、最初から恣意的に選ぶのは無理です。

—— 要するに、世の中に評判の悪い原子カムラの人というのは、デリケートな仕事に携わっていて、自由気ままに自分の意見を出せない人なのです。だから、そういう人は自分から積極的にこういうものに参加、応募などしないですよ。

—— 先生、1 サイクル目、2 サイクル目というのは、それぞれ平成 25 年度、平成 26 年度の話ですよ。

(木村) そういうことです。

—— だから、平成 25 年度は、5 回は調査票で選んだ人でやると。

(木村) そうです。そのほうが、説明はしやすい。

—— こういう結果だったから、次年度（平成 26 年度）はもう少し恣意的に人選をするように考えます、という意味ですね。

(木村) そのほうがいいのではないかと思います。いわゆるムラのムラたる人たちは、こちらからアポイントメントをとって、どうか協力してくださいとやらないと、参加してくれないと。

今回（サイクル 1）の実験結果からすると「ムラはない」のだけど、でも厳然としてムラはあるではないかという議論をして、おかしい、ということにしたほうが、説明はしやすいですよ。

—— なぜおかしいか。こういうところに手を挙げてくる人は、本当のムラびとではないと。

(木村) そうです。こういうところに手を挙げてくる人は、ムラではないというような結論が出てくると、ではムラを変えるのフォーラムを実施するためには、ムラびとはピックアップしていくしかない、という議論になる可能性が高いと思っています。でもそういう手続きを踏まないと、最初からピックアップをすると、なぜピックアップしたのか、ということになってしまうので。

—— 分かりました。

(木村) なので、ある意味 1 回目は、失敗するということが念頭に置きながら、なるべく効果をあげて、次につなげていくことを考える必要があると思います。そうでないと、おっしゃる通り、本当のムラびとは絶対に来ないのですよ。そうだけど、そういう人たちを引き出す手を作るために、外堀を埋めないと駄目な気がしているということです。

時間も過ぎているのですが、どうでしょうか、何を基準にするかということまでは決めておきたいと思いますが、少し持ち帰って見てもらったほうがいいですか。

—— いや、持ち帰ったら、なかなか返事しないですよ。

(木村) そうすると、12月5日に予備日をとってあります。その日に会議を開いてもいいですか。では、5日にやらせてください。今日の続きを議論したいと思いますので、資料を眺めてもらって、候補に挙げてもらえればと思います。

名前、連絡先などいろいろ入れると1ページは埋まってしまうので、1ページしか残らないので、そのスペースに収めなければいけないのですね。なので、あまり多くのものは入れられないのです。だけど、ピックアップしておいて、この辺を入れておくといいのではないかという候補を、次回最初にお聞きして議論したいと思います。

その後、ワークショップの内容や段取りをそれまでに少し整理しておきますので、そこでまたディスカッションをしたいと思います。

あとは、今日は説明できませんでしたが、竹中君に「原子力村」についてまとめてもらった資料があります。次回はこちらも話してもらおうと思っています。

2. 「原子カムラ」について

—— 次回の話題になると思いますが、今竹中さんの資料をざっと見てみたのですが、原子カムラとはこういう定義だという、エビデンスはありますか。朝日のどこかに書いてある、読売のどこかに書いてあるとか。

(竹中) 新聞は定義していません。

—— 今朝、別の会議で同じような議論があって、北村先生が、そういうエビデンスを集められないかとおっしゃっていたのです。確かに、そういうものはないなと思ひまして。

(木村) おそらく、エビデンスはないです。定義しているものはないでしょう。

(竹中) スライド 1 に載っている志村さんの本は、これから読んでみようと思ひています。そこに書いてあるのがどういうものかということと、それから、飯田哲也さんは、明確に定義をしています。

—— 飯田哲也氏は、自分が言いだした言葉だとあちこちで言っていますね。それもエビデンスがあるのですか。

(竹中) いや、実際に出てくるのは、飯田哲也さんより先です。1980年代に、「原子力工業」という業界誌で、「原子力村」という言葉が使われています。

—— 志村さんは、最近の本で言われているのですか。

(竹中) 最近の本の中で、隠語だということを言っています。

—— その辺の議論は、ぜひ次回に。

3. その他

(木村) 最後に日程だけ確認したいと思います。12月5日を第3回にします。その後第4回、5回、6回までは日程が決まっています。次回は、12月7日の業務推進全体会合に持ち込む資料の方向性が見えるようにしたいと思ひています。

第4回(12月21日)は、調査票の内容の締め切りになるので、このときまでには説明用紙も最終決定し、調査会社に出す必要があると思ひます。

第5回(1月8日)になると一段落して、フォーラムの概念ができたところで、具体的にどのようにフォーラムを動かしていくかというのをまとめていきたいと思ひます。この日は、POの岩田先生が見学に来るかもしれないとおっしゃっていました。

—— あまり変な話しないほうがいいですね。

(木村) いや、自由に発言してもらったほうがいいのです。1月7日に、中間審査みたいなものがあった、次の日に現場訪問で来てもらおうかなと思っています。現場といっても、ディスカッションだと思いますけど。

1月8日は、具体的な設計、マニュアル要件を洗い出して、1月、2月をかけてマニュアルを作成していこうと思います。マニュアルというよりは、手引きみたいなものですね。

このようなスケジュールで進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。それでは、長くなりましたが、第2回のフォーラム検討会議を終わりにします。また来週になりますけれども、よろしくお願いします。

以上